

Weekly Survey

トーマス連邦巡回裁判所判事の最高裁判事承認を審査する米上院司法委員会で、同氏のセクシュアル・ハラースメント疑惑が噴出。告発したトーマス氏の元部下の女性と氏の言い分は真っ向から対立。問題の性質も絡んで全米がその成行きに注目。

中嶋嶺雄

政治的思惑絡む「セクハラ」

米連邦最高裁判事の承認をめぐる上院司法委員会の公聴会において、「セクシュアル・ハラースメント」(性的な嫌がらせ)に関する議論が戦わされ、全米の注目を集めた。

このほどブッシュ大統領によって連邦最高裁判事に指名された黒人の連邦巡回裁判所判事クラレンス・トーマス氏に「セクシュアル・ハラースメント」の疑いがかけられたのである。十年ほど前、トーマス氏の助手を務めていたオクラホマ大学法学部教授の黒人女性アンタ・ヒル氏は、在職中トーマス氏からたびたびデートを強要され、断るといかがわしい性的な話を何度も聞かされたという。トーマス氏はこの疑惑を全面的に否定し、人種差別であるとして徹底的に抗議した。

今週号のカバーストーリーでは、この「セクハラ」疑惑が取り上げられているが、ほぼ20ページにわたって詳細に解説されていることからわかるように、この問題がアメリカ社会に投げかけた波紋は予想以上に大きいようである。事実、米三大テレビネットワークをはじめとする各テレビ局が、公聴会の模様を終日生中継するなど、ウォーターゲート事件以来の異例の出来事として受け取られている。

一方、今週の *TIME* の表紙(カバー)に「SEX, LIES & POLITICS」とあるように、今回の事件を純粋な「セクハラ」問題ではなく、

政治的思惑の絡んだものとして捕らえる声も少なくない。保守派のトーマス氏を支持する共和党と反対する民主党。今回の論争は、来年の大統領選挙や上下両院議員選挙をも念頭に置いたものであるようだ。

しかし、いずれにせよ、今回の論争がこれほどまでに徹底的に行われたのは、9人の米連邦最高裁判事の任命がアメリカ社会全体に強大な影響を与え得るものであるがゆえであることは間違いない。

上院本会議は、公聴会の議論に基づいて15日夕方、トーマス氏の承認投票を行い、彼の任命は承認された。こうしてブッシュ大統領は勝利したけれど、連邦最高裁判事からリベラル派が一掃されたことは、保守化を物語るものとして、アメリカ社会の将来に大きな問題を残したと言えよう。

台湾独立の声高まる

今週の *Asia/Pacific* 欄は、*TIME* としては久々に台湾問題を取り上げて、去る10月10日の建国記念日(双十節)の盛大な軍事パレードの写真や「台湾独立」を叫ぶ急進派のデモ隊と警官隊との対立の場面を紹介している(pp.34-35)。そのタイトルは「Playing With Fire」(危険な火遊び)となっており、「北京と台北の保守派が激怒している」というリードがついているけれど、それは台湾の野党民主進歩党(Democratic Progressive Party)がこのところ「Taidu」(台独)つまり「台湾独立」を呼号してい



トーマス氏の「セクハラ」を告発したヒル女史

るからにはかならない。去る10月13日に開かれた民主進歩党第5回党員代表大会は、「主権独立自主の台湾共和国を樹立する」という条項を綱領に盛り込むとの提案が圧倒的多数で可決され、中台関係に新たな緊張要因が加わった。もっとも、民主進歩党と言っても、すべてが急進独立派というわけではなく、主流は穏健派が占めていて今回も新主席に選ばれた許信良氏は、「台湾全住民の公民投票によって決める」という条件をつけて急進派を抑えることに成功した。しかし、主席選挙では施明德氏を推す急進派との票差が182票対163票と僅差だったことは、確かに注目に値する。

国際的重要さ増す台湾

こうした動きが、なぜ「危険な火遊び」かと言えば、まず第一に、ソ連社会主義の崩壊に伴うバルト三国の独立やソ連の各民族共和国における独立気運の高まりの中で、中国と当局が「台湾独立」にきわめて警戒的になっているからである。また、民主進歩党の一部が中心になって、台湾の国連再加盟という難題を提起したことも中国当局の神経を逆なでしている。TIMEは、中国の対台湾工作小組のリーダー、楊尚昆主席が、台湾武力解放を示唆して「火遊びするやからは燃やされて灰になろう」(p.34)と怒っていると述べている。このような情勢にあるだけに、双十節では、ここ数年にない大規模な軍事パレードを台湾側は挙行了したのであった。

もっとも、台湾人の中から出た稀代のステーツマンとして内外で人気の高い李登輝総統は、台湾の経済的・社会的発展をテコに、「自由・民主・均富」の「現代三民主義」をスローガンに掲げて、事実上の独立国である現状を維持しようとしており、経済的・社会的成功をもたらした「台湾経驛」を大陸に及ぼすことこそ重要だと考えている。したがって、「台湾独立」の国民投票が行われても、現状では多くの民衆が“Taidu”（台独）にかけることには決してないだろう。TIMEも言うように“Taidu”は、すでに2000万人口の85%を占める台湾人の間の分裂を拡大するという点でも、「危険な火遊び」ではあるが、現在程度の「台湾独立」世論が存在することは、



台湾はでっち上げだと反論するトーマス氏

かえって台湾の政治に適度の緊張をもたらし、台湾のさらなる発展に寄与するという見方もできなくはない。いずれにせよ、台湾の存在がアジアの国際社会の中でますます重要性を増していることは疑いなく、去る9月中旬に日台知的交流の場として開かれた第3回「アジア・オープン・フォーラム」について、日本の各紙やテレビがこれを大きく取り上げていたことにもそれは表れていた。

まかり通る密室政治

日本に関する記事としては、自民党総裁選を扱った“The Making of a PM” (p.36) が掲載されている。近年、日本問題への世界的な関心の高まりの中で、多数の外国人研究者が日本の政治構造を論じるようになった。日本研究者の影響力の増大とともに派閥(faction)は、日本政治を分析する上でのカギとして、外国人にも知られるようになった。

今回の宮沢喜一氏の総裁確定劇は、総理総裁を決める上で派閥力学が果たす役割の大きさを改めて証明することになった。TIMEは「彼の選出は、昔ながらのやり方で決まった」と述べ、「日本政治の閉鎖的世界」に言及している。日米構造協議で問題になった日本の不透明な産業構造などとともに、外国人には理解し難く、かつ日本人の目から見ても時代遅れの派閥政治を根本的に改めていかなければ、日本はますます世界の中で孤立していくことになるのではないか。

(なかじま みねお / 東京外国語大学教授)